



32.

田中 孝 (当時13歳)

フェラリン家所蔵

1920年当時13歳、上六小学校在学中に、
この素晴らしい絵を描いた田中孝は、
のちに奄美の自然に魅せられた画家「田中一村」になります。

若くして才能を認められたにもかかわらず、
特定の画壇に属さず師につかず、奄美に移住。
日本のゴッガンと称される、孤高の日本画家です。

田中一村記念美術館より引用

田中一村の生涯

明治41年(1908)、栃木県に生まれる。幼い頃から画才を発揮し、7歳の時、父の彌吉(号稲村、稲邨)より「米邨」の号を与えられる。大正15年東京美術学校入学後、わずか2か月余りで退学、その後南画家として活動する。第19回青龍社展に「白い花」を出品し入選するが、その後中央画壇とつながりをもつことはなかった。昭和33年50歳で単身奄美大島に移住。紬工場で染色工として働き、蓄えができたなら絵を描くという生活を繰り返し、亜熱帯の植物や動物を描き続け、独特の世界をつくりあげた。絵描きとして清貧で孤高な生き方を通した一村は、昭和52年(1977)、69歳でひっそりとその生涯を閉じた。

田中一村の没後の再評価は著しく、今では数多くの画集も出版され、生涯を描く映画も2006年に企画された。2001年、鹿児島県は奄美大島北部・笠利町(現・奄美市)の旧空港跡地にある「奄美パーク」の一角に「田中一村記念美術館」をオープンさせ、一村のコレクションを常設展示している。地元素材をふんだんに使い、奄美の高倉をイメージした展示室には、一村の東京時代、千葉時代、奄美時代の作品約80点(年4回展示替え)が展示しており、日本画家田中一村の画業に触れることができる。

<http://amamipark.com/isson/>